

世界遺産暫定一覽表 記載資産候補再提案書

資産名称 松 本 城



2007年12月

長野県・松本市 共同提案

(1) 提案のコンセプト

① 資産名称・概要

○資産名称 **松本城**

○概要

ア 松本城

松本城天守は近世城郭史の上では早期の「天正・文禄期」に属し、現存する最古の天守遺構である。この天守は漆黒の下見板張りの城壁をもち、上部の白漆喰とのコントラストの美しさから広く人々に知られている。

松本は信濃の中心に位置し、千国街道や野麦街道により日本海側と繋がり、中山道により江戸や京都にも通じ、北国脇往還善光寺道は城下町を貫いている。このように松本は中部高地の交通の要衝の地にあり、1593年から94年にかけて秀吉配下の石川数正・康長父子により三重の堀に囲まれた松本城天守が築造された。

松本城天守は湿地帯に高い技術をもって築造され、天守閣をはじめとする近世城郭の主要建築が完全に残存する我が国唯一の平城であり、縄張りは「ていかくしき梯郭式+まつかかしき輪郭式」の典型的なくろよ曲輪配置となっている。

明治初期、倒壊の運命にあった天守は、市川量造ら松本市民の手によって存立が保たれた。その後、明治34年、松本中学校長小林有也らの主唱により、困難と闘いながら大正2年荒廃した天守の補修を完了した。昭和5年、城域は史跡となり、「国宝保存法」により昭和11年には国宝に指定された。以上のように天守は市民の熱意によって守られてきた。

また、昭和25年から30年にかけて、文部省の直轄工事第1号として解体復元工事が行なわれた。工事中の昭和27年3月「文化財保護法」により国宝に指定されている。

このように、世界の城郭遺産の中で、松本城は日本を代表する遺産として十分に普遍性をもっていると考えられる。

イ 松本城の歴史的特徴

(7) 武田信玄によって整えられた松本城の縄張り

1550(天文19)年甲斐の武田信玄は、信濃府中に侵攻し守護小笠原氏を敗走させ、これを手中にした。平坦地にあった小笠原氏の支城、深志城を整備し以後33年間信濃経営のつひな兵站基地とした。近世松本城の本丸・二の丸・三の丸の縄張りは、ほぼこの時期に出来上がっていると考えられている。1582(天正10)年武田氏が滅び旧地を回復した小笠原氏は、深志城を松本城と改めた。

(4) 豊臣方の石川数正・康長父子によって築かれた戦略的拠点としての城

豊臣秀吉は1590(天正18)年小田原の戦後石川数正を松本に入封させ、関東の徳川家康を監視する5重6階の松本城天守(天守・渡櫓・乾小天守)を1593(文禄2)年から1594年にかけて築造させた。さらに総堀をさ濠い、土塁を築き土塀を建て、諸櫓や楼門を造り、城内の館の修造および武家屋敷の建設を行ない、近世城郭として松本城を整備した。天守の壁は上部が白漆喰で下部は漆黒の下見板が張られていた。鉄砲戦を想定して堀幅を広げ、天守の壁を厚くし、銃眼をうら穿ち、土塁上には狭間付き土塀を廻した。また、「馬出し」をともなった虎口や攻撃的な横矢掛を備えた外柵形で堅固な戦略拠点とした。

(ウ) 軟弱地盤に工夫を凝らして築造された典型的な「平城」

松本城天守は、女鳥羽川と薄川の複合扇状地の先端の軟弱地盤に平城として築造された。

石垣を低くし、天守の重量を均等に地面に伝えるために天守台内部に16本の梅の土台支持柱^{とだいしじぼしら}を埋め込んである。さらに、天守台の石垣を積み上げるために堀底に松の丸太を筏のように敷き詰め、石垣の沈下を防止する^{いばだしきょう}筏地形の工法が採用されている。さらに、天守の重量による地面のズレを防止するため、2列の土留の杭が堀底に打ち込まれている。平城の縄張り^{ていかくしほ}は「梯郭式+輪郭式^{りんかくしほ}」といわれる^{うしろけんご}後堅固の城である。

(エ) 近世城郭史の上では「天正・文禄期」に属する現存最古の城郭

日本の近世城郭は安土城・豊臣大坂城の出現により始まるが、以下の4期に分類されるのが一般的である。「天正・文禄期」→「慶長前期（関ヶ原戦前）」→「慶長後期（関ヶ原戦以後）」→「元和以後（江戸期）」^{げんなん}。このうち松本城天守は現存近世城郭では最古であり、「天正・文禄期」に属す。すなわち関ヶ原戦以後築城された白亜の姫路城や彦根城は、領国支配の拠点としての「権威の象徴としての城郭」である。それに対して松本城天守は戦略的城郭として堅固さを誇る城郭である。この性格の違いは豊臣政権から徳川政権への歴史的移行を反映している。

(オ) 泰平の世になって付設された辰巳附櫓と月見櫓

石川数正・康長父子によって天守・渡櫓・乾小天守が築造されてから40年後の1633（寛永10）年から1634年頃、3代将軍家光の従兄弟松平直政が辰巳附櫓と月見櫓を増設した。一国一城令が出され城郭の普請についても厳しい統制がなされている中、御家門大名松平氏にしてできた増築である。この2棟には際立った武備は見られない。総檜造りで三方取り外し可能な舞良戸^{まいらと}や朱の刎高欄^{はねこうらん}を巡らし、天井は船底天井に仕上げられている。また、壁は白漆喰の大壁造りで^{しやうしよ}瀟洒な造りになっており、戦略的な天守と好対照をなす泰平の「元和以後の江戸期」の城郭である。

松本城の天守は戦略的拠点としての城郭と、泰平の世の優雅な櫓が「連結複合」した天守群である。

② 写真



全 景



外 堀

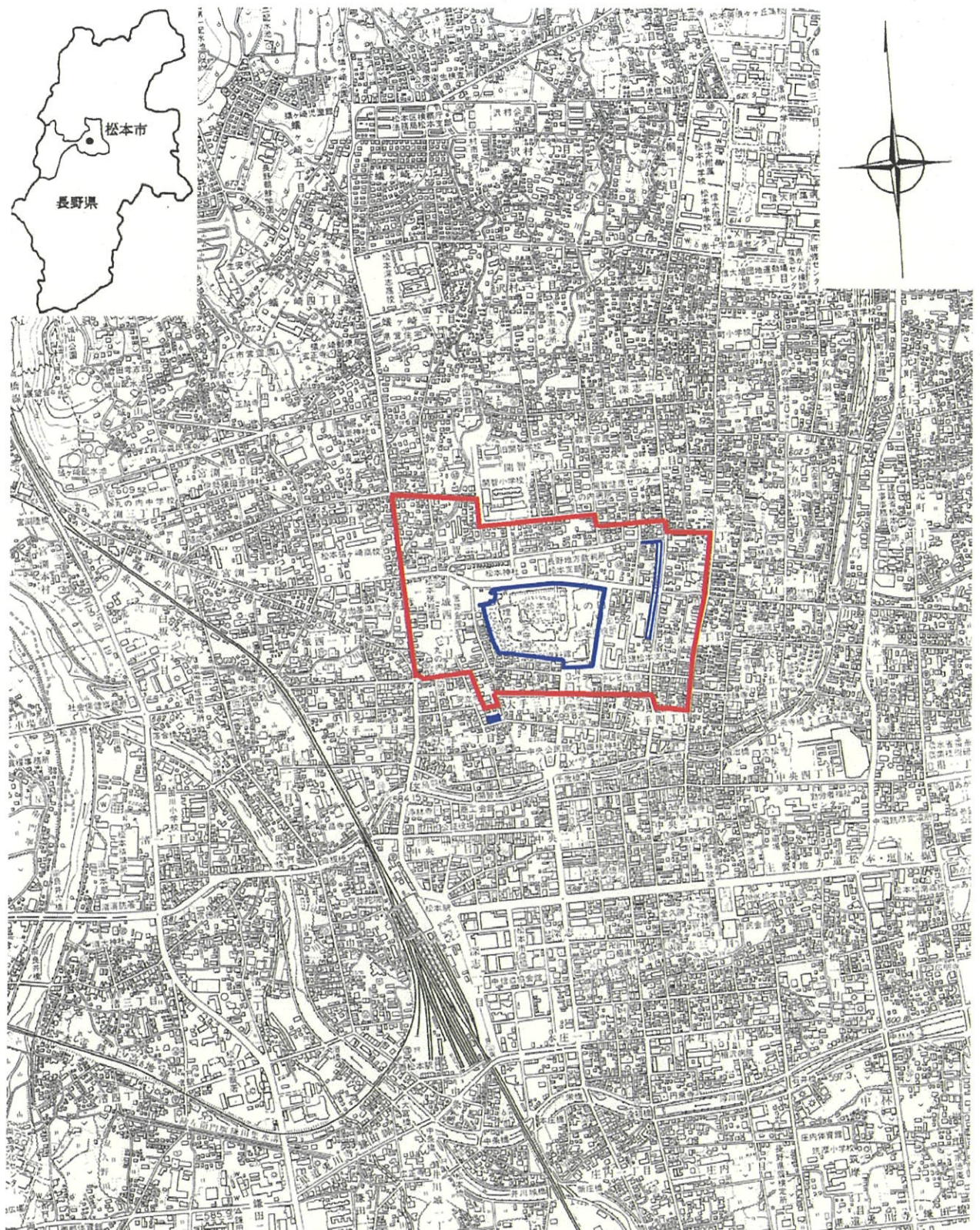


冬の松本城



内堀と松本城

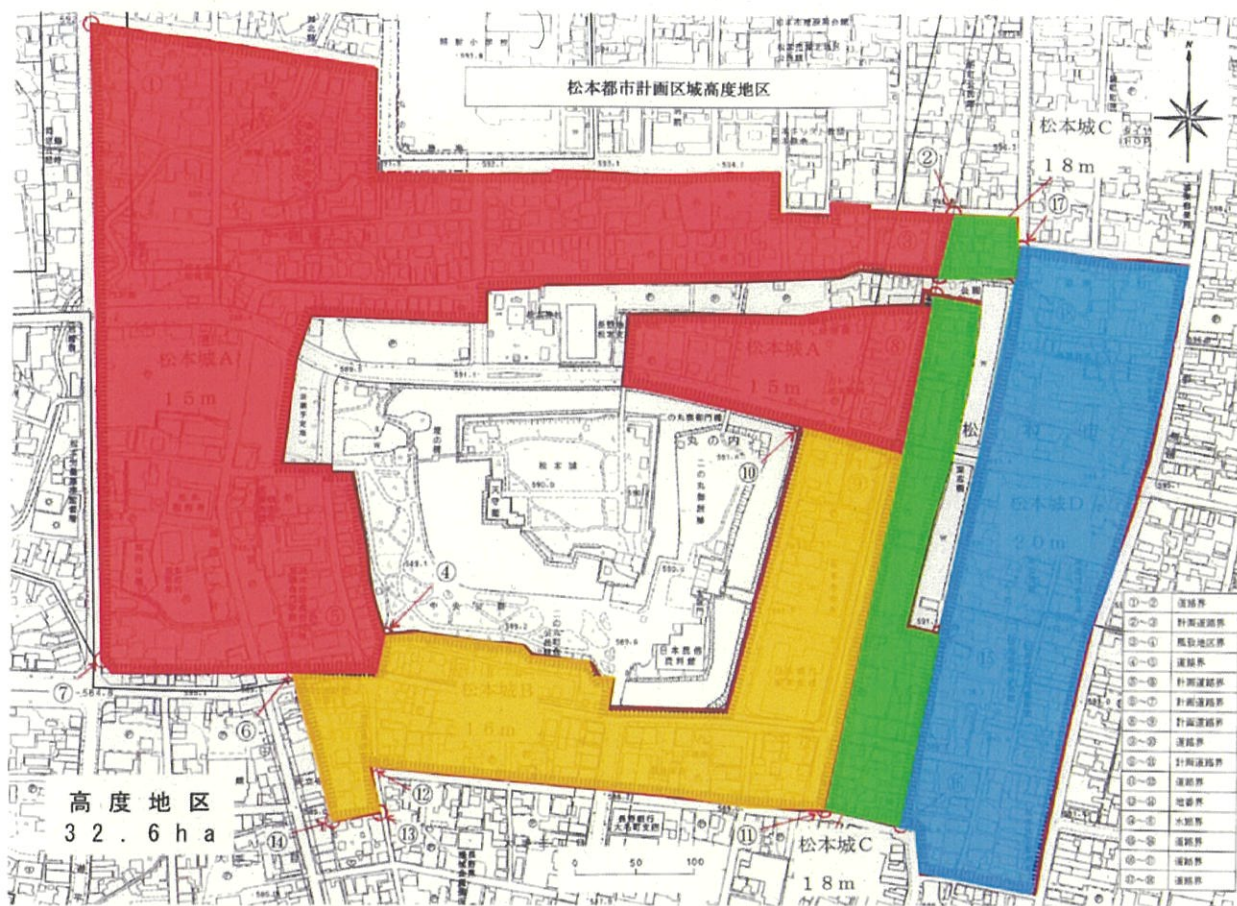
③ 図面



0 1,000m

- 資産候補範囲(史跡指定範囲)
- 資産と一体をなす周辺環境の範囲(松本城周辺高度地区)

資産と一体をなす周辺環境の範囲(松本城周辺高度地区)



松本城A (15m)

松本城C (18m)

松本城B (16m)

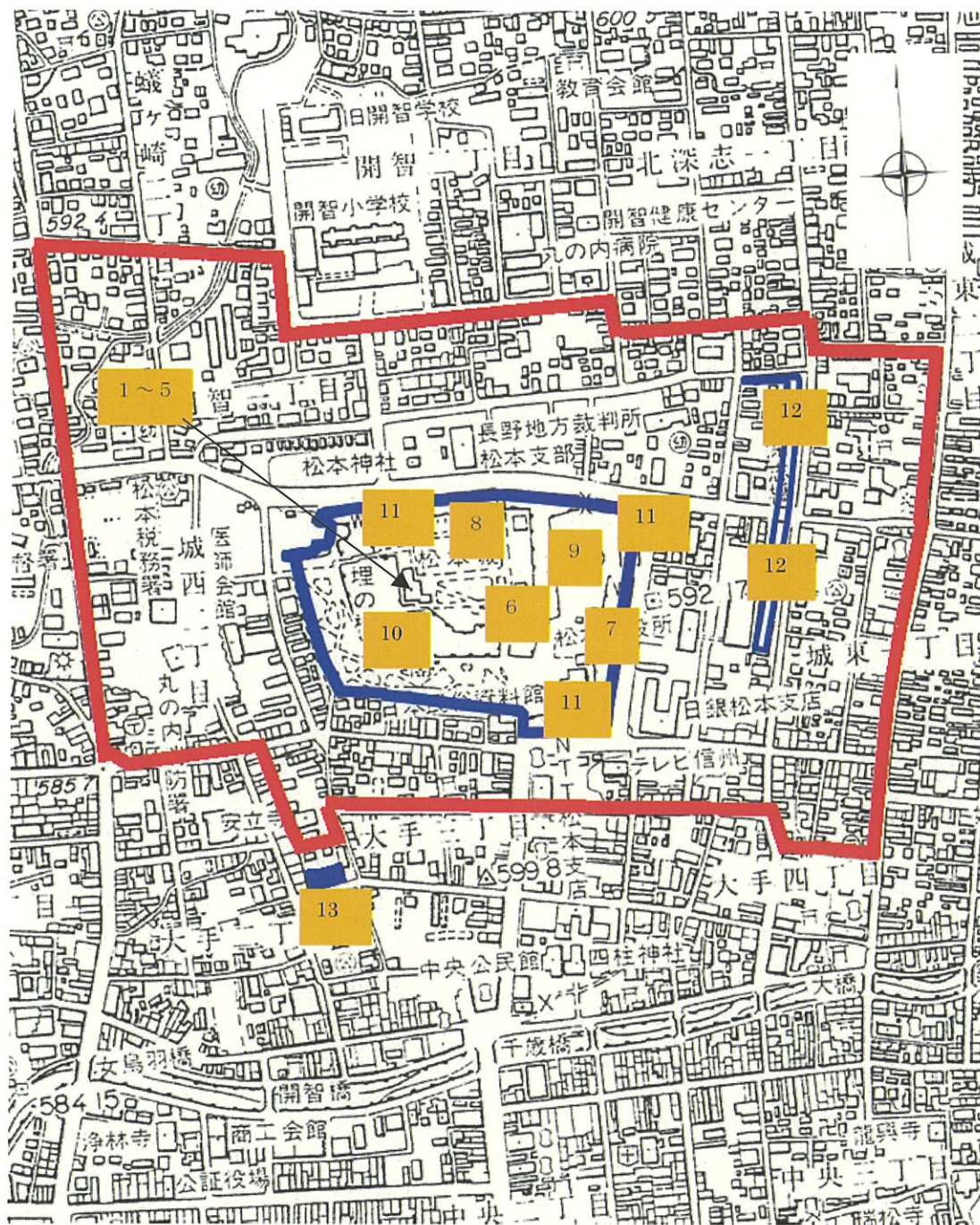
松本城D (20m)

(2) 資産に含まれる文化財

① 整理表

No.	名称	保護の主体	保護の種別	面積	要約
1	天守	国	国宝	267.1㎡	1593～94年(文禄2～3)石川数正・康長父子が築城。五重六階の天守では我が国最古の城郭建築。屋根は本瓦葺、入母屋造り。外壁は各層とも上部大壁塗り白漆喰仕上げ、腰は黒漆塗り下見板張り。軟弱地盤を考慮して天守台には16本の支持柱を埋め込み加重を均等に地面に伝える工夫をしている。
2	乾小天守	国	国宝	74.7㎡	天守北側に位置し、屋根は本瓦葺、入母屋造り。三重四階で丸太柱が多用されている。外壁は上部大壁塗り白漆喰仕上げ、腰は黒漆塗り下見板張りである。
3	渡櫓	国	国宝	39.6㎡	二重二階、本瓦葺。乾小天守と天守を連結している。外壁は上部大壁塗り白漆喰仕上げ、腰は黒漆塗り下見板張りである。
4	辰巳附櫓	国	国宝	28.9㎡	1634年(寛永11)頃、松平直政により天守に付設された二重二階の入母屋造り、本瓦葺。外壁は上部大壁塗り白漆喰仕上げ、腰は黒漆塗り下見板張りである。
5	月見櫓	国	国宝	35.5㎡	辰巳附櫓とともに付設された観月楼。一重地下一階付。寄せ棟造り、本瓦葺。外壁は大壁塗り白漆喰仕上げ。三方取り払い可能な舞良戸を配し、天井は船底天井、朱の刎高欄を廻している。
6	黒門枳形	国(予定)	登録有形文化財(予定)	758.94㎡	本丸防衛の要であり一の門は昭和35年に復興され、二の門と袖堀は平成2年に復元された。
7	太鼓門枳形	国(予定)	登録有形文化財(予定)	771.19㎡	1594年(文禄3)頃築かれた。二の丸への正門。門台北石垣上に太鼓楼が置かれ、時刻や登城の合図等の発信源として重要な役割を果たした。平成8年から3年をかけて、平成11年に復元された。
8	本丸御殿跡	国	史跡	18,307.00㎡	御殿は天守の完成後の建造で、城主の居所と政庁を兼ねた政治の中枢部であった。1727年(享保12年)に焼失後は再建されなかった。現在は瓦で遺構の範囲を示している。
9	二の丸御殿跡	国	史跡	29,827.18㎡	本丸御殿焼失後、藩の政庁が二の丸御殿に移され、幕末まで藩政の中枢機関であった。昭和54年から6年間発掘調査され、史跡公園として整備され平面復元された。
10	内堀	国	史跡	26,923.58㎡	松本城の堀はすべて湧水で満たされた水堀で、本丸に近い方から内堀、外堀、総堀の三重になっており、内堀の広い所は60mの幅があり、当時の火縄銃の有効射程距離を考慮して造られた。堀は片薬研堀という方法で掘られ天守の方は浅く、外側は深くなっていて、深い所は3m以上あった。総堀の両側には防衛上の先のとがった杭列(全国で2例目)が発見された。
11	外堀	国	史跡		
12	総堀の一部	国	史跡		
13	西総堀土塁跡	国	史跡	679.48㎡	松本城築城時の残存土塁で、武家屋敷跡や土塁堀裾部に敵の侵入を防ぐ防御用の杭列が(全国2例目)発見された。

② 構成要素ごとの位置図



1 天守	5 月見櫓	9 二の丸御殿跡	13 西総堀土塁跡
2 乾小天守	6 黒門枅形	10 内堀	
3 渡櫓	7 太鼓門枅形	11 外堀	
4 辰巳附櫓	8 本丸御殿跡	12 総堀の一部	

■ 資産候補範囲(史跡指定範囲)
■ 資産と一体をなす周辺環境の範囲(松本城周辺高度地区)

参考 『享保十三年(1728)秋改松本城下絵図』による城郭と城下町の復元図(平成16年の都市計画図に重ねてある)



構成要素ごとの写真(番号は整理表に一致)



1 天守



2 乾小天守



3 渡櫓



4 辰巳附櫓



5 月見櫓



6 黒門枳形



7 太鼓門枳形



8 本丸御殿跡



9 二の丸御殿跡



10 内堀



11 外堀



12 総堀の一部



13 西総堀土塁跡

(3) 保存管理計画

① 個別構成要素に係る保存管理計画の概要

昭和25年より昭和30年まで文部省直轄5ヵ年計画事業により松本城天守の保存修理が完成した。昭和52年には16項目からなる「松本城中央公園整備計画」が策定され、この計画に基づき松本城天守等の整備が行なわれた。平成11年には「文化庁」及び「史跡松本城整備研究会」の指導助言により18項目に厳選した復元整備の最終完成時期を幕末維新期の松本城の姿とする「松本城およびその周辺整備計画」を策定した。

個別構成要素に係わる保存計画の概要は下表のとおりである。

1	国宝	天 守	昭和30年に松本城天守保存修理工事が完了し、国宝天守五棟は松本城管理事務所が保守点検に勤めている。昭和41年文部省直轄「国宝建造物保存修理工事の塗装工事」が行われ、以来文部省の指導により毎年継続して外壁下見板の黒漆による塗装ならびに月見櫓の朱塗の芻高欄の塗装を継続している。また昭和30年に設置された消火施設及び避雷針等の定期的保守管理を継続している。また、耐震にかかわる検査等を行い建物の安全性にも配慮している。 今後、保存工事以後50年を経て定期点検ならびに随意的の検査をおこない保存に万全を期する。
2	国宝	乾小天守	
3	国宝	渡 櫓	
4	国宝	辰巳附櫓	
5	国宝	月見櫓	
6	黒門枳形		昭和35年の復興以来、門台石垣のせり出しが認められ、定期的な観測による監視体制をとっている。門台石垣のせり出しに伴う黒門二階床面のひずみがみられるので長期的な観測結果により、門台の積み直しと黒門自体の修復を行う予定。
7	太鼓門枳形		平成11年復元竣工した。太鼓門下見板の定期的な塗り替え、及び袖塀の控柱の点検補修等により保存につとめる。また、太鼓門二階部分の門台よりせり出して造られている部分の床面沈下の状況を監視し対応する。
8	本丸御殿跡		天守解体復元工事の際の発掘調査により遺構を確認し、平面復元標示を行う予定。
9	二の丸御殿跡		昭和54年～56年の発掘調査により整備し平面復元標示を行う。また、東北隅櫓及び東土塀の復元のため、平成14～17年にかけて発掘調査を行い、今後は調査研究を重ね復元整備を行なう予定。
10	内 堀		明治10年代に松本中学校の敷地として埋め立てられた内堀南側部分の復元を行い、また、外堀と内堀を分けていた足駄塀の復元を行う予定。
11	外 堀		平成9年と18年の発掘調査により文化庁の指導を受け、現在宅地となっている南・西外堀跡を内環状北線道路拡幅改良工事との整合を図りながら復元整備を行う予定。
12	総 堀		平成15～16年東総堀土塁跡の発掘調査を実施し、土坡の遺構を保護するため石垣改修工事を行う。
13	西総堀土塁跡		平成19年2月残存土塁保護のため国史跡追加指定。一帯を歴史公園として整備する予定。

② 資産全体の包括的な保存管理計画の概要

昭和30年文部省直轄5ヵ年計画事業により松本城天守は保存修理が完成し、その後、昭和35年には黒門の復興、太鼓門台の復元等の整備が進み、昭和52年「松本城中央公園整備計画」が策定された。この計画に基づいて昭和54年から60年に二の丸御殿跡の発掘調査と史跡公園整備がなされ、平成2年には黒門桁形の復元、同11年には太鼓門の復元がなされた。同年「文化庁」並びに「史跡松本城整備研究会」の指導助言のもとに「松本城およびその周辺整備計画を」策定してそれに基づいて保存管理につとめている。

ア 整備の意義

- (ア) 松本城は日本を代表する貴重な文化財であり、人々の暮らしと文化を培ってきた。今後も松本市の象徴として、広く後世に引き継ぐ使命をもっている。
- (イ) 松本市は文化・自然と人々の営みが有機的に調和した、日本でも有数の住みよい都市として成熟しつつあるが、中でも松本城は、市民のかけがえのない財産であり、松本市の発展を担う重要な役割をもっていることから、積極的に歴史的な景観保護と整備に取り組む必要がある。

イ 整備の目標

- (ア) 整備にあたっては「松本市都市景観条例」をはじめ、関係諸規定を尊重し、市民の協力及び意識改革により、松本城と調和のとれた整備を進める。
- (イ) 松本城周辺の整備にあたっては、史実に基づいた復元整備を行う。
- (ウ) 旧城下町の特色である武家屋敷、町屋、小路等についても所有者及び地域住民の理解と協力を得ながら、可能な限り保存整備をする。
- (エ) 松本城とその周辺の景観を維持するため、市民の合意のもとに、歴史的景観を積極的に保護する。

ウ 整備の方法

整備の方法は、諸条件に応じて次のとおりとする。

- (ア) 復元による整備
- (イ) 平面標示による整備
- (ウ) 説明板による表示
- (エ) その他（CG等）

エ 復元の基準

- (ア) 建造物・構築物の復元にあたっては、次の基準を満たすものについて整備を行う。
 - a 発掘調査により遺構が確認できること。
 - b 指図（設計図）または指図相当の資料があること。
 - c 写真資料があること。
- (イ) 堀跡について発掘により位置、規模、構造が確認できた場合は、関係住民の理解と協力を得ながら整備を行う。

オ 復元の歴史的時期

- (ア) 幕末維新期の松本城の姿に可能な限り復元することを目的とする。
- (イ) 景観・管理上やむを得ない場合は、歴史的環境整備について弾力的に考える。

③ 資産と一体をなす周辺環境の範囲、それに係る保全措置の概要

平成11年策定の「松本城およびその周辺整備計画」では以下のように考えている。

ア 三の丸地域の整備

- (ア) 三の丸地域は上級家臣団の居住地域であるので、その面影が感じられる整備を行うため住民の理解と協力を得ながら整備・保存に努める。
- (イ) 道筋や屋敷割り、役所跡などは、保存あるいは位置表示をする。
- (ウ) 都市再開発、道筋の敷設または拡幅などの際、可能な限り史跡の保存に努める。

イ 城下町の景観整備と町並み保存

(ア) 建築物の高さ規制

松本城本丸及び二の丸（外堀）内から北アルプス及び東山の優れた景観保護、松本城天守閣の存在感保持、また松本城周辺の住環境の保全を図るため、都市計画法に基づき高度地区を指定し、以下の4エリアにより景観を保持する。

□ 松本城A（高さ15mエリア 17.2ha）松本城址風致地区（松本城二の丸）隣接または含まれるエリア

□ 松本城B（高さ16mエリア 6.3ha）松本城址風致地区に接したエリア

□ 松本城C（高さ18mエリア 2.4ha）松本城址風致地区に接し松本城Bの外側のエリア

□ 松本城D（高さ20mエリア 6.7ha）上記3エリア以外で東総堀東側のエリア

(イ) 説明板の設置

大手門枳形など諸門跡・親町・枝町など

(ウ) 街路・小路の整備

善光寺街道・御徒士町・鍵の手・食い違いなど

(エ) 武家屋敷の復元

(オ) 歴史的建造物の保存

町屋・武家屋敷など代表的な建造物

(カ) 歴史的水路・井戸の整備

蛇川・はんのき川・紙漉き川・辻井戸など

(キ) 史跡指定地の拡大

(ク) 十王堂の整備 4カ所

博労町、伊勢町、餌差町、安原町

(ケ) 残存土塁の整備・保存

土井尻残存土塁、松本市役所東庁舎南側残存土塁

ウ 石垣の整備保存計画

史跡松本城の石垣は石垣積み技法の最も発展していく文禄、慶長、寛永の各時期の貴重な石垣が遺構と共に残っている。平成14～15年度に史跡松本城石垣現状調査を文化庁の指導により本丸、周辺部においてに現地調査を実施し、石垣カルテ（修正箇所、破損状況、補修内容、危険度）を作成し整備保存を図っている。

(4) 世界遺産への登録基準の該当性

① 資産の適応種別及び世界文化遺産の登録基準番号

i 人類の創造的才能を表現する傑作

日本の近世城郭は「天正・文禄期」・「慶長前期（関ヶ原戦前）」において、天守の城壁は下部に下見板をはり、雨をはじく黒漆か墨と柿渋を混ぜた液を塗布した。この下見板は50年位の寿命があるといわれている。その上部に白漆喰の白壁があり、天守の屋根により雨水から守られていた。やがて、「慶長後期（関ヶ原戦後）」は外観のすぐれた権威の象徴としての白亜の城が造られるが、天守の性格が戦略的城郭から領国支配の拠点としての城郭に変わったことを意味していた。松本城天守は日本城郭史の上で、戦略的城郭としては現存最古の天守である。

iv 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式・建築群・技術集積または景観の優れた例

近世城郭は中世山城から平城や平山城に変化するが、松本城は典型的な平城で複合扇状地の軟弱地盤の上に築かれている。緩やかな傾斜地に築かれた総堀・外堀・内堀は、水面を一定に保つために「水切り土手」や土橋を設けて水の流下速度を調節している。

天守建築にあたっては、天守台内部に16本の梅の土台支持柱を埋めこんで、天守の加重を石垣だけでなく地面に直接伝える工夫がなされている。また、軟弱地盤に石垣を積み上げるために堀底に筏地形が施され、さらに地盤のズレを防止するため土留の杭が打ち込まれている。

当時の石垣の技術では天守台上面は正矩形に築くことができず、松本城の天守台も糸巻型で4周が内側に湾曲している。この天端の歪みを「武者走」で吸収し、1階入側柱以内の身舎を正しい長方形につくり、上層階の柱筋を通し天守の重量をこの一階身舎の下の土台が受け止め、さらにその下の土台支持柱に伝える仕組みになっている。まさに湿地帯に技術の粋を集めて造られた天守である。

② 真実性の証明

- ・昭和5年11月19日 本丸・内堀・二の丸（二の丸堀跡地を除く）の一部が「史蹟名勝天然記念物保存法」により国の史蹟に指定された。同年松本城天守の実測が行なわれ平面図及び立面図が作成された。
- ・昭和11年4月20日 松本城天守外4棟が「国宝保存法」により国宝に指定された。
- ・昭和25～30年 戦後初の文部省直轄5ヵ年計画事業により天守閣の「国宝保存工事」が行われた。同年松本城天守の実測が行なわれ平面図及び立面図が作成された。
- ・昭和27年3月29日 松本城天守外4棟が「文化財保護法」により国宝に指定された。
- ・昭和41年 文部省直轄の「国宝建造物保存修理工事」の漆塗工事が行なわれ、以後松本市は継続的に毎年天守の漆塗工事を行なっている。
- ・昭和45年1月17日 総堀の一部が「文化財保護法」により国の史蹟に追加指定された。
- ・平成19年2月 土井尻残存総堀土塁が国の史蹟に追加指定された。

○完全性

16世紀、西洋から伝来した火縄銃の普及に伴い日本の城郭建築は、堀幅・壁の厚さ・狭間の設置等劇的に変化した。松本城はその典型として戦国末期に造られた、現存する日本唯一の「鉄砲戦を想定した、戦うための漆黒の木造天守」である。昭和25年から30年にかけて行われた国直轄の解体復元工事により、創建時の天守に復元され、昭和41年以来毎年、城壁の下見板

の黒漆塗装工事が史実に基づき継続される等、創建時の姿を維持している。平城として湿地帯に築城された天守は、軟弱地盤対策が堀底・石垣建設・天守台の強化等に施され、戦国末期の城郭建築技術の粋を結集したものである。松本城築造とともに整備された城下町は、中部高地にあっていくつかの歴史の道により、日本海側と太平洋側の諸地域に開かれ商業活動を展開した。松本に収斂する歴史的街道の道筋及び城下町を構成する旧道筋や水路等は現在も残されている。

③ 類似遺産との比較

ア 日本の近世城郭史の上で鉄砲戦に備えた戦略的城郭として現存する最古の天守

松本城を除く国宝三城は、日本近世城郭史の上で1600（慶長5）年以後に造られた天守で、徳川の権威を示す目的で造られた領国支配の中核としての城であり、対大坂城包囲網の城郭として築造された「優雅な外観をもつ白亜の天守」である。松本城天守は、秀吉が関東の家康を監視するために築造した、漆黒の下見板が張られた堅固な戦略的な天守である。

イ 松本城は国宝四城のうち唯一の平城である

姫路城は渦郭式の平山城。彦根城と犬山城は連郭式平山城である。松本城は「梯郭式+輪郭式」の平城であり、後堅固の縄張りの城郭である。

ウ 湿地帯に技術の粋を尽くして築造された城郭である

松本城を除く国宝三城は、平山城で固い岩盤の上に築かれている。松本城は複合扇状地の先端の軟弱地盤に築造されたため、天守台内部に16本の土台支持柱を埋めこみ天守台を強化し、堀底に筏地形を施し石垣を積み上げる等の工夫をしている。また土留の杭を堀底に打ち込み地盤のズレを防いでいる。

エ 松本城天守は望楼型天守と層塔型天守の両方の特徴をもっている

近世城郭史の上からは、1610年以前の天守台は正矩形に仕上げることができず、不定形な矩形であり古い伝統をひく望楼型の天守が建てられた。したがって、姫路城も彦根城も犬山城も望楼型天守である。松本城の天守台は菱形で、天守は内側に湾曲した天守台の上に造られている。また、望楼型天守の特徴である屋根裏階が存在する。一方、天守は二階ごとのブロックを3個積上げる方法をとっており、各階を積上げていく層塔型天守の特徴も備えている。

オ 戦国末期戦略的拠点としての天守と江戸期の泰平の世の櫓が連結複合している

姫路城の天守群は連立式、彦根城と犬山城は複合式の天守形式をもっている。

松本城の天守群は「天正・文禄期」の戦略的天守と櫓が連結しており、それに「元和以降（江戸期）」の瀟洒な櫓が複合した「連結複合式」の天守形式である。建築様式の違いが明確に分かり、時代の変遷を見ることができる城郭である。

カ 総堀の両側より極めて貴重な防御用の杭列が発見された歴史遺構を持つ城郭である

昭和45年追加指定された松本城総堀の両側から防御用と推定される杭列が発見された。この遺構は米沢城の遺構に次ぐもので「大坂冬の陣図屏風」に描かれた大坂城の堀の防御用の杭と同じ役割をもっていたものと推定されている。松本城が戦略的拠点であったことを示す貴重な歴史的遺構である。